

第40巻 第4号 予告

特集「国際保健協力の充実化に向けて」

〔巻頭言〕 公衆衛生分野の国際協力	村松 稔
国際保健医療協力における情報システムの構築について	林 謙治
国際保健医療協力のプロジェクト形成について	兵井伸行
国際協力活動のための国内整備の課題	近藤健文
国際保健医療協力の人材育成	河原和夫
現場から見た国際保健医療協力の現状と課題	綿引信義
防疫活動の現状と今後の方向	稲葉 博

第41巻 第1号 予告

特集「大都会の高齢者(仮題)」

編集後記

わが国の平均入院期間は40日を越えています。米国で8日余り、英国で2週間弱。この違いは医療制度の差もあるのですが、「住まい」の事情が根本的に異なるためと私達は考えています。

退院したくとも退院できない、リハビリを受けても社会復帰できない、在宅ケアが叫ばれていても思うにまかせない等、住宅事情に関わる諸問題に加えて、最近の高層・高密度化した居住環境に関連する、アレルギー問題やいわゆるシックビル・シンドロームなども見逃がすことはできません。

憲法に保障された健康で文化的な生活を、その根底で支える「住まい」に対し、公衆衛生的アプローチを試みることは今日ますます重要になってきています。

「住まいと健康」特集号として、本号は公衆衛生の様々な立場からの寄稿をもとに構成しました。しかしながら幅広い公衆衛生の全分野をカバーすることは困難で、たとえば「現場報告」では結果的に環境監視員からの報告に限られてしまい、保健婦が単独で、あるいは医療・福祉機関と連携して、住まいに取り組んでいる先進的实践例などを紹介することができませんでした。本号発行の大幅な遅れと併せ、編集子の不手際をお詫び申し上げます。

末筆ながら、貴重な原稿をお寄せくださった方々に心からお礼申し上げます。

本号の内容が読者各位の今後の公衆衛生活動に少しでも役立つことがあれば幸いです。

(入江 建久)